
翡翠と闇王 その2

Akatuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翡翠と閻王 その2

【Nコード】

N5386Z

【作者名】

Akatuki

【あらすじ】

前に上げた「翡翠と閻王」の続き?となっております。
まずはそちらをお読みください。

この話はBOAからのIF物+ご都合主義設定から成り立っています。

(前書き)

三点リーダーがよくわからない。
こんにちわ。アカツキです。

今回は無理矢理感が感じられると思いますが、スルーして頂けると幸いです。

今回はユーノの出番が少ないです。

そして最後らへんに、ご都合主義設定の形が現れます。

それではどうぞ。

漸く、この感情の正体を知ることが出来る。

我は何処か浮ついた気持ちで地球へと足を運んだ。

そして、我は答えを得た。

それはこの身には過ぎた代物かもしれぬものであった。

二人には感謝しておる。

人としてまだ至らぬ我に、こうして人の心を教えてくれたのだから。

この日、我はまた一步、人として歩みを進めたのだと思う。

翡翠と閻王

〔閻王の為の相談教室〕
開幕だ。

「用事って何処に？」

局内を並んで歩きながら、ユーノはフードで顔を隠している少女へ問い掛ける。

「なに、少々野暮用だ」

サラッと答えるとそれ以上は何も言わず、ディーアーチェは歩いていく。

そしてユーノの仕事場近くまで来ると、二人は立ち止まった。

「じゃあ、こいで」

「うむ。くれぐれも倒れぬようにな」

「ははは。大丈夫だよ」

「信用出来んな」

「………行ってきます」

「ん。行ってこい」

ユーノが更に歩を進め、通路の先へと姿を消す。

見送りを終わるとディーアーチェは来た道を戻り、約束した待ち合わせ場所へと向かった。その場所に着くと約束相手が既に着いており、少女の姿を見つけると手を振ってきた。

「もしや待たせてしまったか？」

「そんな事はないわ。私もちょうど着いたところだったから。さあ、早く行きましょうか」

「……ああ」

そう言つと、約束相手のリンディ・ハラオウンはディーアーチェと共に使用許可を取っておいた転送装置に身を任せた。

時は学生達が遅刻かどうかの瀬戸際を争う頃。場所は地球の海鳴市にある高町家。

その一室に、ディアーチエとリンディ、そして高町桃子の姿があった。

「それで、今日は一人でどうしたの？」

桃子が向かいに正座でいるディアーチエに問い掛ける。

「その、相談したい事が有ってな」

「ユーノ君が居たら出来ない事なのかしら？」

「………そうだ」

二人の問いにディアーチエは正直に答える。

この二人に嘘や曖昧な事を言ったところで、即見破られるのは分かりきっているからだ。

正直、夜天一家よりも敵に回したくない人達だ。

「それでどんな相談かしら？おばさん張り切って相談にのるわよ」

いや、とてもおばさんには見えぬからな。とディアーチエは心中で呟いておく。

これも見れば分かりきり以下略。

「うむ。実は近頃、我はユーノに対して不思議な感情を持っているのだ」

「「不思議な感情？」」

ディアーチエが語りだすのと同時に、桃子とリンディも真剣な表

情で耳を傾ける。

とりあえず、ディアーチエが語った事柄を下に並べてみる。

「ユーノが傍らにいないと胸が空虚感に襲われる」

「他の女と喋っているのを見るとフルドライブでエクスカリバーを解放したくなる」

「その体温を肌で感じたいと気づけば考えている」

「E t t c E t t c」

肌を赤くさせ、俯き体をもじもじとさせながらぼつぼつと語るディアーチエ。

何かもう王様というより愛でるべき小動物な様子の少女を目の前にして、相談相手の役を請け負った女性達はと言つと――

「（ニコニコ）」

――笑っていました。

そりゃあもう輝かんばかりの笑みを浮かべています。

心中察するに、自分達の娘（義娘）からはこういった青い春な話
は出て来ないため、まるで自分の事の様に心を踊らせているのでし
よう。

「ディアーチエちゃんは、そのユーノ君に対する気持ちは何なの
か知りたいのね？」

リンディが変わらずニコニコ笑顔でディアーチエに問い掛ける。

「うむ。それで、二人にはこれが何なのか分かるだろうか？」

暴れる感情を抑制する様に胸をギュッと手で抑え、ディアーチエ

は答えを二人に求める。

リンディが桃子に目配せすると、桃子はニコニコから暖かな笑顔に変えて告げた。

「……それは恋心ね。」

桃子の言葉を聞いたディアーチェは言葉を失った。

（我がユーノに恋心……？）

「わ、我がユーノに懸想しているだとおっ！！？いや待て、我はあやつと会ってまだそれほど時間が経っておらん！なのに恋心などと」

ディアーチェが顔を真っ赤にして叫ぶ。

そこに人生の大先輩である二人から追い撃ちがかけられる。

「自分以外の女性と話しているのを見てイライラするのは嫉妬ね」「ぐっ！！」

「好きな人と一緒に居たいって思うは当たり前なのだから、恥ずかしがることは無いわ。それに」

二人は口を合わせて言った。

「恋に時間は関係ありません」

「・・・むう」

ディアーチエは二人の言葉を聞き、今までの自分を、ユーノへ接する自分を思い返してみる。

これは本当に恋なのか否か。

(・・・そうか。ユーノが傍にいない時、我は寂しかったのか。我はユーノが傍に、共にいる時は満ち足りていたのだな)

すると、胸にあった隙間がストンと埋まったのを感じた。

同時に、あれだけ暴れ狂っていた感情が静かに収束され、代わりにふわふわとした暖かなものが胸に広がっていく。

自然と、ディアーチエは笑みを浮かべていた。

「自分でも分かったみたいね」

「うむ。桃子、リンディ、礼を言う。漸くスッキリとした気分になった」

「お役に立てたようだなによりだわ。どうする？善は急げという言葉葉が地球にはあるけれど」

「この気持ちが理解出来た以上、焦ることはない。何せ、話に聞いている限り子鳥達はユーノと友人として付き合っていると聞いておるのでな」

「本音は？」

「・・・心の準備が出来ておらぬ」

ピイツと顔を背けて言うディアーチエに微笑ましい笑顔を向けるリンディと桃子。

この日この時、少女が一步前へと進んだ瞬間であった。

あの後しばらく高町家で時間を過ごし（主に二人のディアーチエに対する質問攻め）、その後二人に礼を言い別れたディアーチエは、本局の通路を歩いていった。

そして彼の職場の目の前まで来ると、そこで立ち止まる。

「……来い。暁の書」

ディアーチエが一言呟くと、目の前の宙に純白に十字が飾られている一冊の本が現れた。

ディアーチエはその本を手にとると胸元で抱きしめる。

「思えば、お前が世に存在していなければ、こうしてユーノに懸想を抱くことも、そもそもユーノと出会うこともなかったな」

「……ありがとう。」

ディアーチエは暁の書を仕舞うと、ふとある事を思い立ち、踵を返した。

（そうだな。家で食事を作って待っているのも良いか。とは言っても、夕食まで時間が大分あるが、それもまた一興だな）

家で帰りを待ち、暖かな夕食で彼を迎える。

その光景を想像していたディアーチエはある一つの考えにたどり着いた。

（ちょっと待て、それは……）

「……まるで夫婦ではないか」

その後、自分の言葉に頭を瞬間沸騰させて、壁に頭をぶつけたのは御愛嬌という事にしておこう。

END

(後書き)

という訳で、ディアーチエ理解するの巻でした。

如何でしたか？

今回はユーノとの絡みがほとんど皆無なので、私も少々何だかという感じです。

ああイチャイチャさせたいな。

さて、最後にちよこつと出てきた暁の書ですが、これに関してはユーノとディアーチエの出会い共々、あと一つ書いてこの「翡翠と闇王」を一先ず終わらせた後、GODプレイ後に書く予定の「翡翠と闇王 改(仮)」にて説明する予定です。

ですから、書けよ豚野郎！！

と言いたい方もいらっしゃるかもしれませんが、ご了承ください。

では、また上げた時にお会いしましょう。

これで失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5386z/>

翡翠と闇王 その2

2011年12月18日09時51分発行